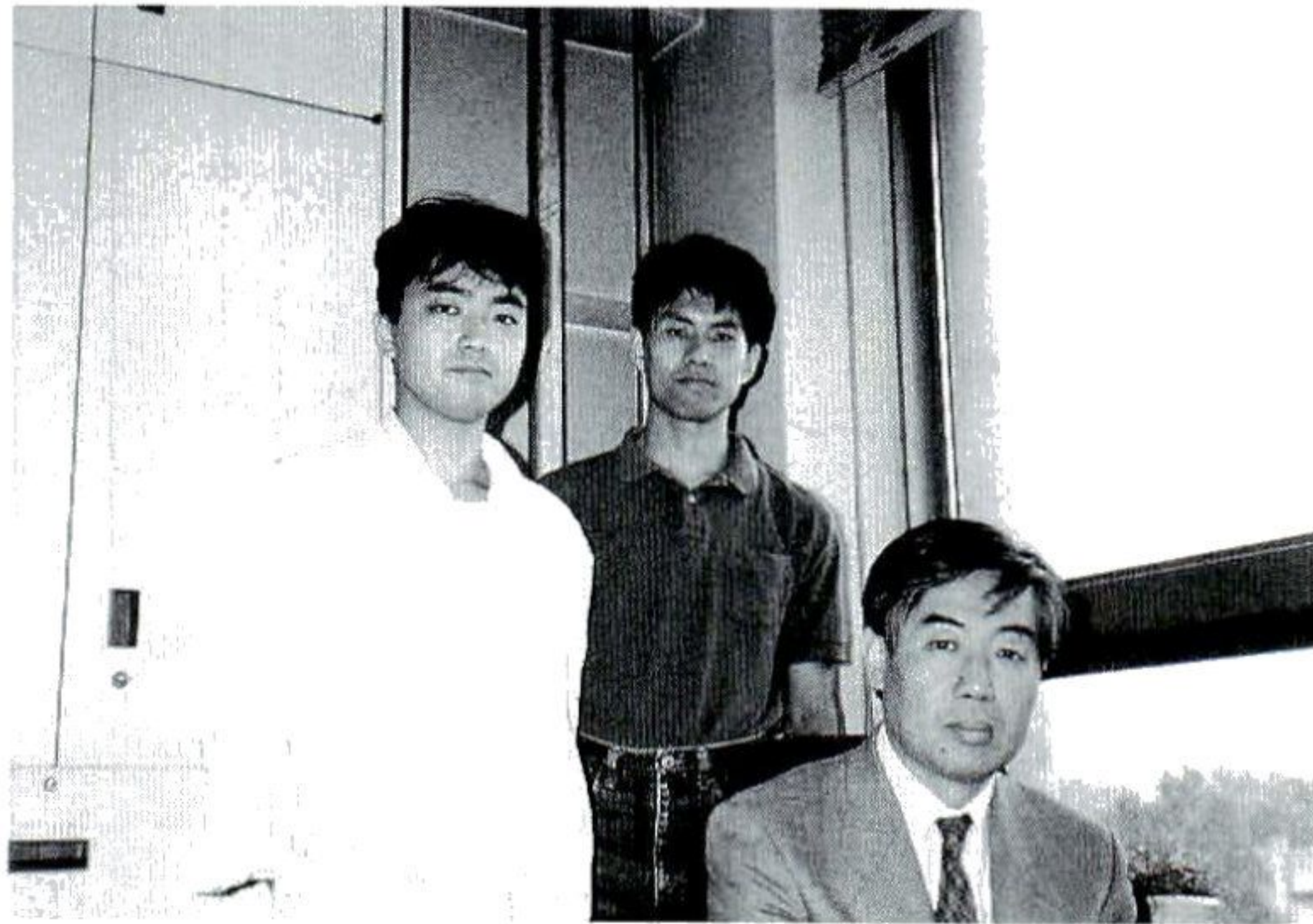




きれいな景色のつくり方

— 中村研究室～社会工学科 —



(右) 中村 良夫 教授
(中) 仲間 浩一 助手
(左) 島見 伸次 さん

人間は調和感覚・美的感覚をもった生物である。広々とした田園風景の中、防風林を北に構えた家々・・・こんな景色を見たときに「美」を感じる人は決して少なくないであろう。しかし、この景色は人が意識的に創り出したものではなく、快適な生活を得るために無意識のうちに創られたものなのである。

このような伝統的景観や自然の景観を研究し、それを守り、機能美をそなえた美しい景観を自覚的に創り出すこと、それが景観工学の目標なのである。

景観工学の研究には理論の研究と景観のデザインを行う実践の2つがある。今回取材させて頂いた中村良夫先生は理論と実践の両方を行い、バランスよく景観工学の研究を行っている。



景観工学の世界にご招待します

6類系の学生以外はあまり訪れる機会のない緑が丘地区。ここから東工大の本館を眺めると、いつも見ている本館とは別の建物のように見え新鮮な気分が味わえる。そんな緑が丘地区の3号館に中村良夫先生の研究室がある。

中村先生は研究で忙しいにもかかわらず、取材のために時間をさいてくれた。取材中の中村先生の話からは景観に対する愛着がひしひしと伝わってきた。

取材が終わり家路についた僕は帰りの電車の中で、中村先生の話思い出しながら深い眠りに落ちていった……

遠くに波の音が聞こえる……

晴れ渡った空、海には小さな島々が点在している。その景色の中に白く長い橋が見える。

「こ、ここは一体……」

自分のおかれている状況を把握できずにいる僕

に誰かが声をかけてきた。

「私たちは景観工学の理論を勉強するために瀬戸内海にやって来たんだよ」

そこには中村先生が立っていた。そして今見ている橋が、本州と四国を結ぶ瀬戸大橋であるとわかった。人工の建造物であるはずのその橋が、風光明媚な瀬戸内国立公園の中で自然の風景とみごとに調和し、独特の技術美を私達に見せてくれている。

「新しい景観を作るとき非常に重要になるのが完成後の景観の予測なんだが、どうしてかわかるかな？」

「うーん、よくわからないんですが……なぜなんですか？」

「新しい景観づくりっていうのは大体が橋を架けたり河川の整備をしたりといった大規模な工事なんだ。これを自然との調和がとれていないからといってすぐに作り替えるなんてことはできないん

だ。莫大なお金と時間がかかっているからね」
「なるほど。でも、一体どうやって景観の予測をするんですか」

「景観を予測する方法は大まかに分けて4通りあるんだよ(表1を参照)。例えば画像合成法を用いるとしよう。この方法を使うと、コンピュータ上であの瀬戸大橋の姿もいろいろな形や色でシミュレートすることができる。そして他の方法でもシミュレートした結果、瀬戸の自然と最も調和のとれた色と形をした橋ができた。それがあの瀬戸大橋なんだ」

「景観の予測方法っていろいろあるんですね。でも、風景の見え方って見る場所によってけっこう変わりますよね。船の上から見るのと陸から見るのとでは見え方が違うように」

「そう、景観を予測するときに非常に大切になるのが景観を見る場所なんだ。これを視点というんだが……そうだ、視点の大切さを感じることができる所がある。そこへ行ってみようか」

私達は車に乗った。車が動き始めると、車窓に映る橋の姿は刻一刻と変化する。こんな所からも視点の大切さを感じることができる。

どれくらい走ったところだろうか、僕は1枚の写真を手渡された。写真は航空写真で、そこには川が山々の間から平野に流れ出している様子が写っていた。

「この写真は京都の宇治川が山から流れ出ている様子を空中から写したものだ。景観工学においては、この写真のような景色を景観とはいわないんだよ。というのも、我々は普通空の上から景

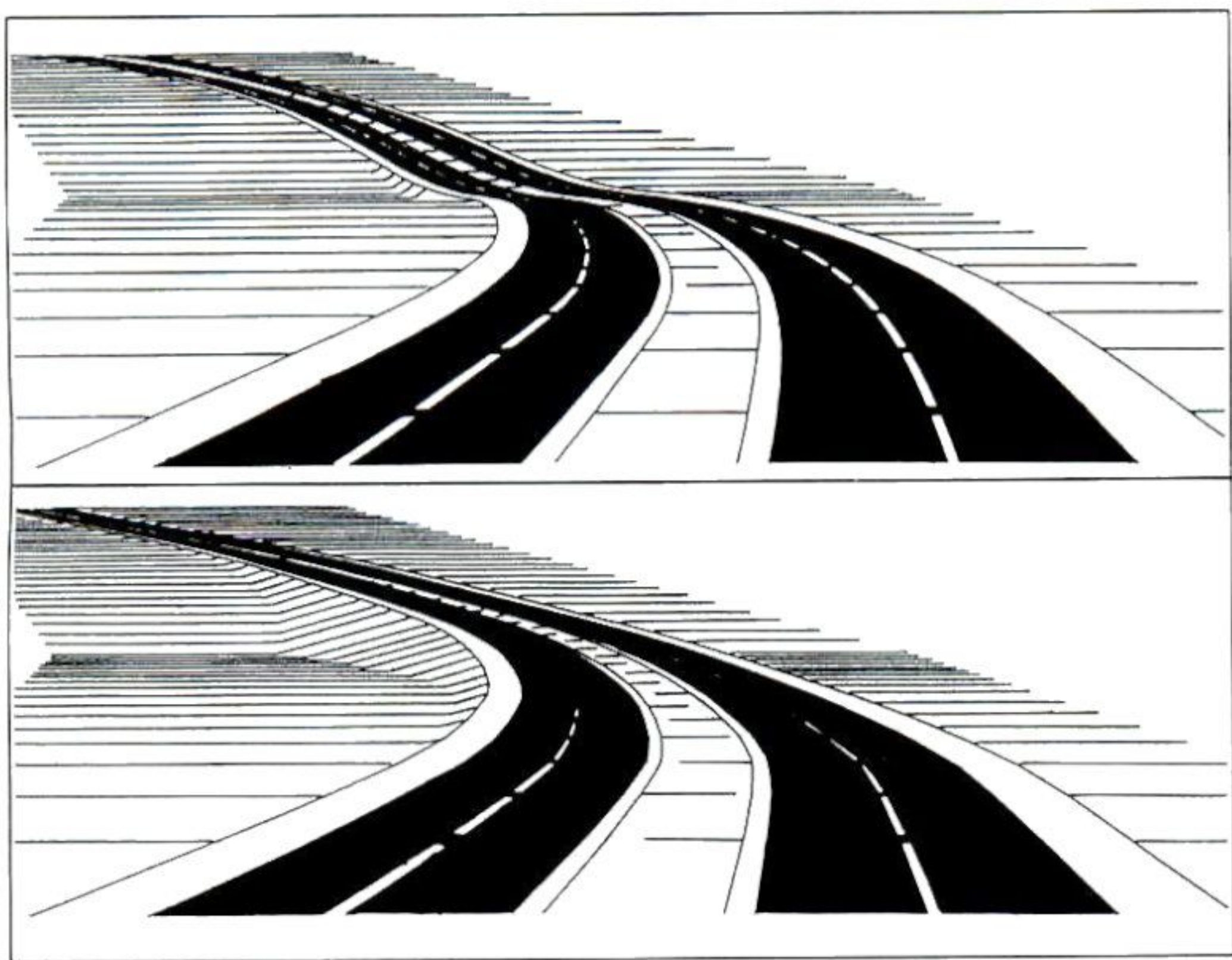


図1 道路のデザイン

手がき透視図	完成後の景観の予測図を周辺の景観とともに描く方法
模型とモデルスコープ	実際に模型を作り、視点にモデルスコープを挿入して直接眺める方法
コンピュータ・グラフィック	完成後の景観の予測図を、コンピュータで描く方法
画像合成法	コンピュータを用いて風景写真の中に建造されるものの図をはめ込むことで景観の予測をする方法

表1 景観の予測方法

色を見たりはしないからね。何だかとても抽象的で奥行きに乏しいと思うだろ……」

と言うのとほとんど同時に車は止まった。ここは京都、宇治川にかかる宇治大橋のたもと。橋の上から川上を眺めると、微妙に霞がかかった山々、そして、彼方から流れてくる宇治川が目にはいる。「これがさっき写真で見たのと同じ宇治川なんだが、どう思うかな」

「こうして橋の上から眺めると川の流れはもちろん、宇治川と山々の連なりとの一体感みたいなものを感じますね。さっきの写真とは違って奥行き感たっぷりって感じです」

「視点の大切さが少しはわかってもらえたかな。でも、景観工学で取り扱う視点は必ずしも固定されたものではないんだ。ある経路に沿って動く視点から見た景観も取り扱っているんだよ」

私達は再び車に乗り込んだ。しばらく市街地を走り高速にのった。快適なスピードの中で次々と目に飛び込んでくる景色を見ながら、自分がいま“動く視点”になっていることがわかってきた。

「いま目の前に見ている道路の設計などが経路に沿って動く視点から見た問題になるんだよ。ここに道路の絵が2枚ある(図1を参照)。2つの道路のうち、どちらの方が走りやすいと思うかな？」

「やっぱり、下の絵の道路の方が走りやすそうですね」

「うん、この場合もやはり景観の予測と視点とい

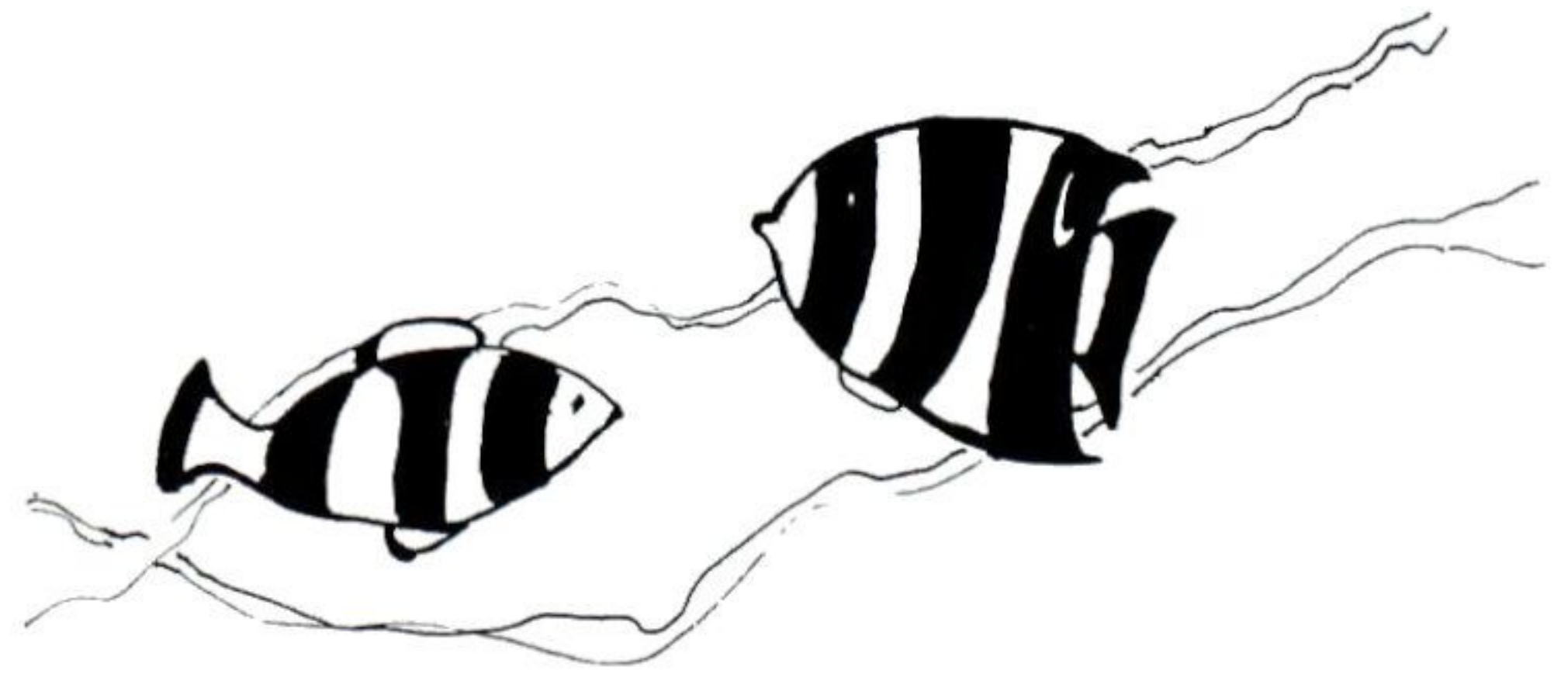
うのが重要になるんだ。走りにくい道路が事故を引き起こしてしまうかもしれないからね」

「景観工学では“景観の予測と視点選び”の2つが非常に大切になるというわけですね」

「景観工学の理論のすべてを一口で説明するのは難しいんだが、その2つはよく覚えておいてもらいたい。この2つのことを知っているだけで景色の見方も多少変わるんじゃないかな……」

目が覚めるとそこは電車の中だった。旅が夢の中の出来事だったことに気付いた。空が少しずつ赤く染まってゆき、電車は夜の中に滑り込んでゆ

く。電車を降り、いつもの街を歩いていると街が少しずつ変わってきていることに気づく。子供のころ見た街の面影はもうほとんどないけれど、今もこの街にかつてと同じ温かさを感じるのは気のせいだろうか。



景観工学はこんなところに生かされている

現在、海や川などの水辺の大切さは常識のものとなりつつある。しかし、水辺の大切さが人々にこれほど注目されるようになってから、わずか10年あまりしか経っていない。中村先生は30年前から水辺の大切さについての研究を続け、それを実践に結びつけてきた。

そして今、中村先生が学生とともに行っている景観のデザインは、茨城県古河の公園のデザインである。およそ20haの古河総合公園は、現在その3分の1が完成している。そしてこの公園作りには4つのポイントがある。

1. 水辺(沼地)の復元 —自然—

いま公園の工事が行われているあたりにかつてあった沼は、国の政策により埋められ水田に変えられてしまった。そこでこの沼を復元しようというわけである。もちろん、水辺が人にとって非常に大切な場所だからだ。しかし、沼だけを復元するのではなく、かつてそこに生息していた動植物をも復元させようというのだから驚きである。

2. 教育の場としての公園 —歴史—

水田はすべて埋められ、沼が完全に再生すると読者は思うかもしれない。しかし、水田の一部は現在のまま残そうというのである。古河のように大都市と比較的離れた街にも都会化の波は押し寄せているため、身近に水田がなくなり米の作り方を知らない子供達も今後出てくるかもしれない。水田を残すことで、そんな子供達に米の作り方を

学んでもらおうというわけである。国の政策で埋められた沼は水田となったが、その水田も減反政策により無用のものとなってしまった。この公園はこういった沼の歴史をとおして、ふるさとの歴史を学ぶ場にもなるに違いない。

3. 公園づくりへの住民参加 —コミュニティ—

現在、公園はその3分の1しか完成していないにも関わらず、維持費は年間2000万円にも及んでいる。水田が使われるようになってからの水田の維持(草むしり等)、沼の復元後の安全管理や衛生面での管理、といった具合に今後の維持費の増加は避けられない。そこで、こういった公園の維持への住民の自主参加が非常に望まれるわけである。もちろん住民による祭やイベントが行われれば街の活性化にもつながるうえ、地域の人と公園の関係も深まり公園への愛着もいっそうわいてくるだろう。また、これから高齢化社会を迎えるにつれて老人の数も増えてくる。老人達が一日中草花の手入れをしても飽きないような魅力的な公園作り、これが公園維持への住民参加の促進につながると中村先生は考えている。

4. 公園と街の融合 —社交性—

“公園と街の融合”とは、中村先生の考え出した公園作りの新たな方向である。これは読んで字の如く、街と公園の境をなくし一体化させていくことを意味している。具体的に言うと、中村先生は公園の中にレストランを作ることによって街と公園の

融合をはかろうとしている。かつての公園が名所と呼ばれていた頃、そこで“食事”が行われるのは、ごく自然な事であった。そんな社交的で楽しい公園をもう一度作ろうというわけだ。良い景色を見ながら食事をするときの気分の良さは、今も昔も変わっていないだろう。

この4つのポイントはどれも、地域の人々の生活と密着したものである。それは、景観が地域の人々の営みによって徐々に作り上げられてゆくものであり、景観工学の研究者は景観の対象のデザインだけを行うわけではないからである。

中村研究室で行われた景観デザインは古河の公園の他にもある。広島県にある太田川の川辺（写真1参照）、二子玉川園近辺の多摩川と野川の合流点の景観、羽田空港の新ターミナルと現ターミナルを結ぶ橋（これは土木工学科の三木先生との合同研究）などである。

中村先生は、「景観のデザインが行われる場所こそが中村研究室の実験室である」と言う。化学反応を行う場といった意味での実験室は中村研究室には存在しない。しかし、自分の理論を実際に証明する場を実験室だとするならば、“研究室の外”こそが中村研究室の実験室であるということがわかってもらえるかと思う。



写真1 広島県の太田川



まちのイメージはこうして出来上がる

ところで、今回の取材では中村先生だけでなく、助手の仲間先生にも景観についてお話を聞いた。

仲間先生は「まちのイメージ」の研究をしている。この研究で仲間先生は“実際に目に映る形”と“頭の中にあるイメージ”の2つがどのように結び付けられるのかを考えている。なんだか難し

げに聞こえるが、仲間先生はわかりやすい例として「門かぶりの松」（写真2参照）について話してくれた。

「門かぶりの松」というのは、誰でも一度は見たことがあると思うが、その枝が屋敷などの門の上にかぶる様に茂っている松のことである。さて、こういう松と門を見たとき人は何を感じ、どんな行動をとるだろうか。「この家は格調が高いな」とか「礼儀正しい家だな」と感じ、門をくぐる時、気が引き締まる思いをする人が多いのではないだろうか。それは「門かぶりの松」が来客に対する出迎えの仕組みを伝統的に表しているからである。つまり、ここでは“実際に目に映る形”が「門かぶりの松」であり、この時“頭の中にあるイメージ”が「その家の礼儀正しさ」ということになる。

こういった具合に、ある形が人に与えるイメージと、そのイメージが人間の行動に及ぼす影響を都市空間にまで広げて考えるわけである。そして、形・イメージ・行動の関係を考えるとき重要になるのが集団表象というものである。

集団表象というのは、“葬式には黒い服を着てゆく”といった、集団が暗黙のうちにとる行動や暗

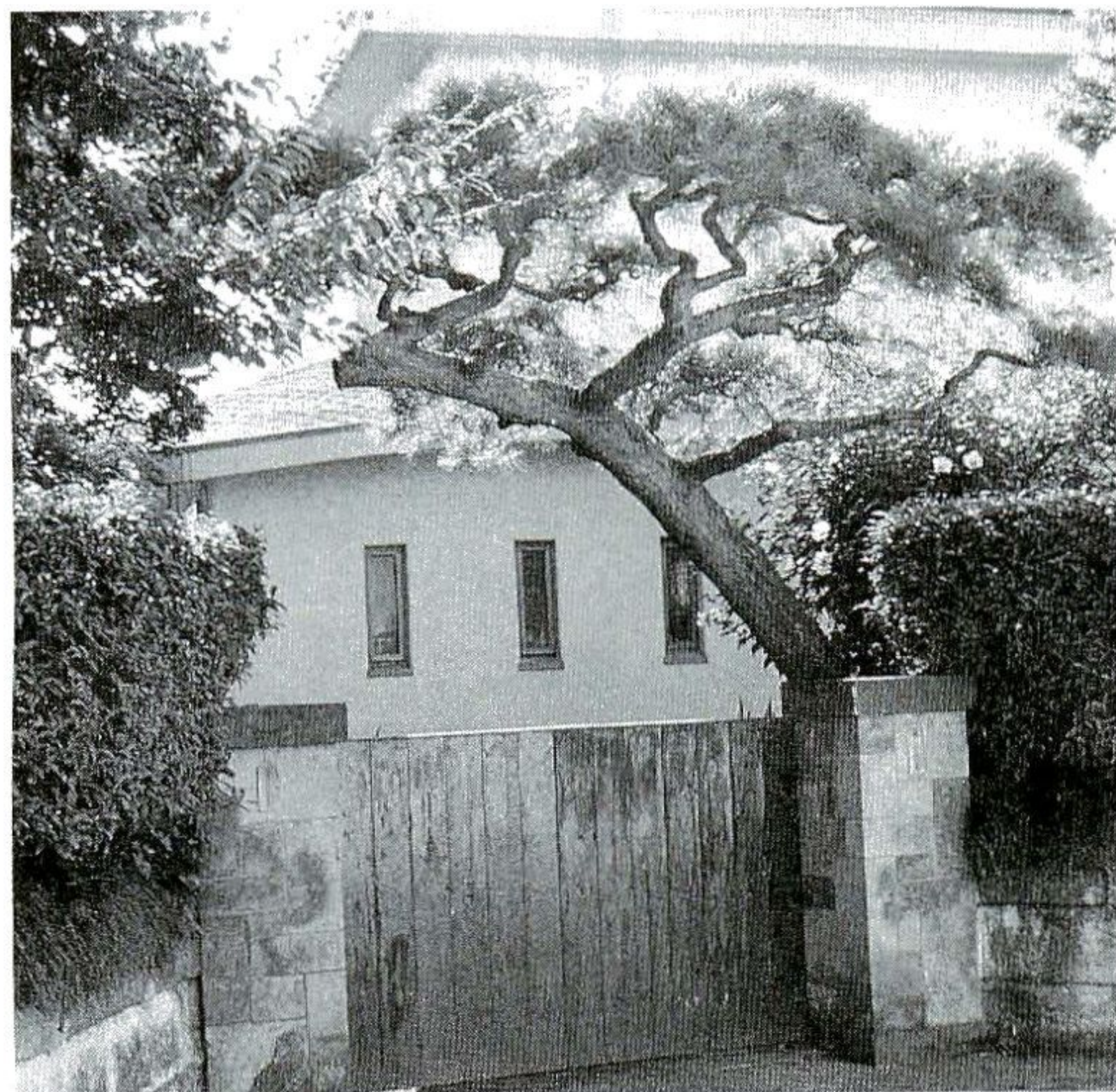


写真2 門かぶりの松

黙のうちに持っている価値基準のことであり、人は誰もが集団表象的であるといえる。この集団表象を考慮に入れることで、人々に良いイメージを与えるような“まち”を仲間先生は考えているのである。

都市空間について考えるときもう一つ重要になるのが、空間というもののとらえ方である。この空間のとらえ方について、仲間先生が面白い話をしてくれた。

これを読んでいる人の中にも彼氏または彼女のいる人がいると思う。その人たちはデートで喫茶店などに入ったときどの席を選ぶだろうか。テーブルをはさんで向かい合って座るだろうか。それとも、カウンターに並んで座るだろうか。テーブルに向かい合って座ったときテーブルの空間が2

人の心の距離までも邪魔しているとしたら……つまり、テーブルをはさんで向かい合って座るというのは決して親密な人間関係をつくるためのものではないということである。例えば、面接で机をはさんで面接官と自分が向かい合って座っているようすを思い出してもらいたい(ということは、初めてのデートで相手のほうからカウンターの席を選んでくれたとしたら……脈ありかもしれない)。

これはあくまでも空間のとらえ方を理解しやすくするために、一対一だけの関係を考えたものである。実際には、これを“まち”とそこに住む人々全体で考えるわけである。“まち”という空間の中で人々がどう関わり合い、そこで何を感じ、どう振る舞うのかが“まちのイメージ”になるのである。



景観デザイナー達はこう思っている

新しい“まち”の景観というのは、都市のデザイナーが作った図面と模型のとおりで作られただけの“まち”ではない、というのが仲間先生の考えだ。玄関のわきに置かれた三輪車、家の前の路地に置かれた植木鉢など、人々の生活が景観をつくってゆく。そして、こういうものに人のいる温かさを感じると仲間先生は言う。ここには、景観というものに対する愛着が感じられる。

また、中村先生が景観工学を教えるときに苦労するのは、素晴らしい景観を素晴らしいと感じることのできる感受性や、そういう景観をつくっていかこうとする意欲を教えるときだと言う。景観が三度の飯より好きだという気持ちで景観工学を学

んで欲しいというのが中村先生の考えである。しかし、これは決して景観工学に限ったことなく、何事においてもこういう気持ちというのは大切なはずである。



今回紙面の都合上、載せることが出来ませんでしたが、院生の島児さんにもいろいろお話をうかがいました。島児さんはご自分の研究等で非常にお忙しいにもかかわらず、私達の取材に長い時間、快く付き合ってくださいました。

中村先生および仲間先生の研究についても、私の先生方の研究に対する理解不足と文章力の不足のために、景観工学の面白さや重要さを、読者の皆さんに十分伝えることが出来なかったように思います。

いまこの記事があるのは、中村研究室取材メンバーおよびLANDFALL編集委員会のメンバーそして取材に快く応じてくれた中村先生、仲間先生、島児さんなど、全ての人々の協力のおかげです。これらの方々に心から感謝します。

最後に、この記事を読んで中村先生や仲間先生の研究に興味を持った方へ。ぜひ研究室へ足を運ぶことをお勧めします。中村研究室にいる人はいい人ばかりですから。

(三林)